

空海 – 弘法大師

仏教の僧であった空海（774–835）は、四国遍路の創始者であると考えられており、88ヶ所をめぐる空海ゆかりの地が繰り返し登場します。現在善通寺（遍路の75ヶ所目）となっている場所で讃岐地方（現在の香川県）の貴族だった佐伯家に生まれた空海は、仏教に深い関心を抱くようになりました。密教に焦点を絞り、2年間中国で学びました。日本に戻ると、真言宗を立ち上げました。空海はその他にも生前に多くの重要な業績をあげました。例えば、現在和歌山県となっている高野山に僧院を立ち上げ、その場所は現在では寺や僧院が多く立ち並ぶ真言宗の最も重要な聖地の1つとなっています。こうした偉業が認められ、彼は死後に「仏教の教えの偉大な師」を意味する弘法大師と呼ばれるようになりました。

信仰心の篤い仏教徒にとっては、四国遍路の主な目的は弘法大師の足跡を追って、この偉大な師をたたえて彼の加護を得ることです。88ヶ所の寺にはそれぞれ、弘法大師に捧げられた大師堂と寺の本尊が安置されている本堂があります。多くの巡礼者は、寺に着くと、ろうそくに火をつけて線香を捧げ、両方のお堂で祈ります。また、88ヶ所の寺のほとんどには、弘法大師が起こした奇跡に関するそれぞれの伝説が伝わっています。例えば、高知県の最御崎寺（24ヶ所目）に伝わる話では、地元の農民が弘法大師に芋を与えなかったので弘法大師が地域の芋を食べられなくしたそうです。また、香川県の屋島寺（84ヶ所目）には、弘法大師が本堂を1晩で作ったという話が伝わっています。